

## 特集・戦後70年 アーカイブズの取組み

## 特集にあたって

## 広報・広聴委員会

今年度は第二次世界大戦終結から70年にあたり、新聞や雑誌、またテレビのみならず、これをテーマにした企画がさまざまな場で試みられた。アーカイブズの世界でも全国各地の機関が戦後70年を念頭においた取組みを展開している。

こうしたことを踏まえ、今号では「戦後70年アーカイブズの取組み」という特集を企画した。一口に戦後70年といってもアーカイブズがこれを取り上げる際の視点は、実に多様である。70年前のまさに戦争中の出来事や人々の暮らしを当時の記録やモノ資料を通じて見ていこうとするもの、戦後から現在まで70年という時の経過に注目するもの、また今年が70年だからということにかかわらず、これまでアーカイブズとしてどのような取組みを進めてきたかという、機関自身の振り返りもまた、戦後の民主国家日本の歩みを跡づける貴重な試みといえよう。

ここに寄せられた6つの論考を概観しておきたい。

沖縄戦以前の記録を焼失している沖縄県公文書館では、開館とほぼ同時に米国に10年にわたり駐在員を常駐させ、膨大な文書、写真等を収集、公開してきた。戦後70年にあたっては、展示「戦後と援護」において、戦傷病者戦没者遺族等援護法に関わる琉球政府と沖縄県の公文書を取りあげた。給付金等の申請のために作成された公文書がもつバイアスに光をあてるとともに、民間の記録やオーラル・ヒストリーなど、重層的な記録の管理と、そこにアクセスできる環境づくりをアーカイブズの課題として捉えている。

徳島空襲でほとんどの公文書を失った徳島県立文書館では、戦後50年、60年等、節目ごとに戦中・戦後を取りあげた展示を重ねて

おり、今回の企画展「民衆が見た戦争」は、5人の職員によるテーマごとの展示解説会を開催した。これは、鳴門史学会（鳴門教育大学）と連携した取組みでもあった。

寒川文書館（神奈川県寒川町）は、地域住民にとって最も身近な自治会資料を取りあげた。戦時下の役場からの通達を多数含む大蔵自治会文書が寄託されたことを機に、そのうち170点を翻刻した資料集の刊行とともに、企画展「記録が語る銃後一大蔵自治会文書にみる戦時下のくらしー」を開催している。

いっぽう、大学アーカイブズを含む66機関が参加する全国大学史資料協議会では、大学横断的な取組みとして全国大学史展「学生たちの戦前・戦中・戦後」を開催した。ここでは、その準備から開催までの経緯、成果と課題が報告されている。

阪神・淡路大震災記念人と防災未来センターからは、救援物資に含まれる食品資料や磁気媒体に記録された映像音声資料、酸性紙が用いられている大量の新聞資料等の保存や媒体変換を進める上での実践的な課題が取りあげられている。

さらに小島浩之氏からは、戦後、アーカイブズが共通にかかえている記録媒体・材料・記録方法の保存利用上の問題点について、戦後70年の変遷を、歴史学・古文書学と資料保存の視点から概観していただいた。

この特集にご協力くださった関係各位にお礼申し上げますとともに、これが会員間の相互交流、相互啓発をさらに活性化する一助となることができれば幸いである。

（広報・広聴委員会 藤吉圭二・柳沢美美子）